キャラクター名: 文愛 創

プレイヤー名:

シンドローム	バロール オルクス	ワークス	記者	カヴァー	小説作家
オプショナル		年齢	30	性別	男性
覚醒	渇望	衝動	恐怖	初期侵食率	34 %
出自	安定した家庭	経験	多忙	邂逅	同行者

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	0	1			1
感覚	2	0	0			2
精神	3	1	0			4
社会	3	0	0			3

HP	26
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ			交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達		
運転：	2		芸術：			知識：レネゲイド	3		情報：ウェブ	4	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
【黄昏に震む戦舞台】 《支配の領域》 Lv.3+ 《絶対支配》 Lv.2						判定のダイス直後に使用。判定のダイス目[Lv+1]個を1に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回
【この世は舞台、人はみな役者】 《支配の領域》 Lv.4+ 《絶対支配》 Lv.3		0				判定のダイス直後に使用。判定のダイス目[Lv+1]個を1に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回
【デウス・エクス・マキナ】 《支配の領域》 Lv.5+ 《絶対支配》 Lv.4						判定のダイス直後に使用。判定のダイス目[Lv+1]個を1に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回
【終演・因果律収束】 《支配の領域》 Lv.6+ 《絶対支配》 Lv.4						判定のダイス直後に使用。判定のダイス目[Lv+1]個を1に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
万年筆	P 執着	N 偏愛		
読者	P 尽力	N 不安		
起源種（オリジナルレネゲイド）	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
妖精の手	3	4	オート	視界	単体	自動	-	
効果：	判定のダイス直後に使用。判定のダイス目の一つを10に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回使用できる							
力の法則	3	4	オート	視界	単体	自動	100%	
効果：	ダメージロール直前に使用。対象が与えるダメージを+[Lv+1]D増加させる。1ラウンド1回まで							
支配の領域	3	6	オート	視界	単体	自動	-	
効果：	判定のダイス直後に使用。判定のダイス目の一つを1に変更する。1回の判定に1度まで。1シナリオに[Lv]回使用できる							
絶対支配	2	4	オート	視界	単体	自動	リミット	
効果：	《支配の領域》と組み合わせて使用。選ぶダイス目を[Lv+1]個にする							
時の棺	★	10	オート	視界	単体	自動	100%	
効果：	判定を自動失敗させる（判定を行わないものには使用不可）。1シナリオ1回まで							
帝王の時間	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：	執筆時間と睡眠時間を確保する							
ポケットディメンジョン	★	-	メジャー	至近	空間	自動	-	
効果：	担当編集から逃げる							
ディメンジョンゲート	★	3	メジャー	至近	空間	自動	-	
効果：	離れた場所への取材も楽々							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

＜3行説明＞
30歳独身小説家。人間観察と面白いエピソードが好きで常に新鮮なネタを求めている。
締め切りが迫ると時間流を調整した異空間でのんびりゆったり執筆しだすしょうもないオーヴァードの端くれ。
戦闘では後方支援専門で、味方を補助しつつ事あるごとに敵の行動を妨害する。前線には死んでも出ない。

＜詳細設定＞
ホラー小説やサスペンス小説、恋愛小説など様々なジャンルを気ままに手がける小説家。人間模様を眺めるのが大好きでマイペース。
普段は自信家で調子に乗っているが追い詰められると途端に逃げ腰のビビりになる。

読んだ者に情景を思い起こさせる緻密な描写と独特の余韻がウリで、読者からの感想にはいつも「とてもリアルであとを引くお話でした」といったフレーズが含まれている……という紹介をされるような作家になりたいと思っているが、やる気の上下が激しいため普段はなかなか筆を執らず作家としては色々と"まだまだ"である。伸びしろはある。多分。
不定期開催のサイン会で知名度を上げたり読者の要望を取り入れようと試みたりするなど割と読者との距離は近い。

小説家として独立して数年後、とある大手新聞で連載していた連載小説が予想以上の伸びを見せ、あまりに過密なスケジュールと執筆を催促されるストレスで過労になりかけたところレネゲイドウイルスの症状が発現した。
「とにかく休む場所と時間が欲しい」という望みにウイルスが反応したのかシンドロームは「バロール」「オルクス」であった。
最初こそ本人にも何が起きたのか分からなかったが、興味本位であれこれと試すうちに空間を拡張して自分だけの異空間に引きこもって担当編集から逃げたり、時間流を調整して締め切りを引き延ばしたりとろくでもない力の使用方法を編み出した。まったくもって担当編集泣かせである。
原稿自体はちゃんと完成させるので仕事に大きな支障を来たしたことはない。
ちなみに感染しているのは起源種。
かつて遺跡関連の取材を行った際に感染したようだが、本人には感染タイミングがいつだったのか、どこで感染したのかさっぱり分からない。